

夏と冬の授業が無い時期には柿ノ木寮の食事は提供されなくなる。帰省する寮生が多くなる
と、少ない人数の食事を用意するのは割高になるからだ。自炊をする寮生は、自炊室で食事の
用意をするのだが、これには本格的な料理からカップ麺のお湯注ぎまで大きな差があった。川
淵という料理自慢の寮生が居た。大勢に声をかけて出資を募り、その資金で材料を購入しては
みんな共同炊事をしていた。そのレパートリーは幅広く、三千年の歴史を遡るような中華料
理を作ったりもしていた。

その際に自炊生達は共用の冷蔵庫を使うのだが、その食材の管理法にも個性があふれていた。
次から次へと好みの食材を買い込んで来て、それを詰め込んだまま忘れてしまう冬場のリスの
ような寮生も居れば、そうした忘れ去られたドングリをほじくり出すような寮生も居た。川淵
くんは、どちらかというと後者の発掘タイプで、微妙に匂いを発し始めたような材料でも上手
に料理しては自炊仲間から好評を得ていた。こうした舞台裏の話を知らずに食べている分には
良いのだが、何かの拍子で賞味期限がどうだった、などの話題になると、急にお腹が痛くなる
繊細な胃袋の寮生も居た。自分の鼻を信じられないうちは、こうした数値情報を聞いただけで
体に変調が生じる例もあるようだった。吾輩ら鹿にすれば、匂いを確かめないで食事をするの
はあり得ないことなのだ。

料理自慢に限らず、自炊生は各自好みの調味料や香辛料などをそろえていた。その貸し借り
は普通のことだったが、中には高級な香辛料だという至高の存在が冷蔵庫に鎮座することもあつ
た。他人には一切手を触れさせるものかとの決意が、何重もの包装に表れ、他の凡百ほんひゃくを圧倒し
ていた。それでも、時にはあっさりと使い尽くされることもあった。パエリアのために用意し
ていたサフランとか言う香辛料が消え失せた時、川淵くんは激怒した。必ずや、かの邪智暴虐じゃちほうりやく
の輩を反省させなければならぬ、と決意した。

川淵くんはまず手始めに掲示板に張り紙をした。「先日、私のサフランが自炊室の冷蔵庫から
無くなってしまいました。何か知っている人が居たら是非教えてください。大事にしていた物
なので、私はとても悲しく思っています」などと書かれていた。柿ノ木寮の掲示板は南寮と北
寮の両方の出入り口に用意されていて、一日に何度か誰もが目にするはずだった。しかし一向
に芳しい反応かんぱんはなかった。というのも寮生の多くは、掲示板を見ないようにしている傾向が
あった。それは、掲示される内容というのが、掃除の予定だとか廊下歩行時の注意など何や
ら面倒な物が多かったからだ。それで実際の情報伝播は、人から人へ直接伝わっていく口コミ